

いつもの生活様式、それが奇跡

太田 貴子 香川県高松市 四十六歳

リモートになった、会社はスニーカーでよくなった、オンラインで全て事足りるようになった。そんなことが言われるようになって母がポツリと呟いた。「コロナ禍になっても私の生活はなんにも変わらない」。

その言い方はどこかつまらなそうであり、またある意味幸せそうでもあった。実際、新しい生活様式が叫ばれるようになって、母の暮らしぶりは昔のままだった。

新しい生活様式になり、植物を育てる人が増えた、とメディアで報じられるようになった。しかし、実家には春夏秋冬、いつも季節の花が咲き誇り、私たちの目を楽しませてくれる。私たちにあって「何も変わらない」実家の庭は母がいつもお花を育ててくれているおかげだ。

幼い頃から、いろんな感情を抱き、門をくぐった。いつもそこには母が丁寧に育てた花たちが迎えてくれた。玄関のドアにたどり着く数歩、私はいつもそこで気持ちを整え「ただいま」の声を出してきた。物言わぬ「プランタの家族」たちは日々無言で私を励ましてくれたのかもしれない。恋に破れた日、試験に落ちた日、葬儀で疲れ果てた日。

そう思うと、母のいつもの生活様式が、日々の習慣が、奇跡に思えてきた。それなのにいつも余裕がなく、ちらりとチューリップやアジサイやバラを横目で見ては、私もまた無言で通り過ぎた。

ごめんね。植物たちを見て、そんな声が漏れた。

ありがとう。母を見て、そっと思った。